

イラン、サファヴィー朝の7彩 (ハフト・ランギー) タイル *Haft Rengi Tile*

author 後藤 泰男 | Yasuo Goto

ごとうやすお——INAX文化推進部ミュージアム活動推進室室長/1959年生まれ。1985年、豊橋技術科学大学物質工学専攻修了。同年、INAX入社。窯業技術研究室、分析センター、常滑東工場でタイル技術開発にかかわる仕事に携わる。2006年、ミュージアム活動推進室ものづくり工房を立ち上げ、2008年より現職。

[クローズアップ・タイル]

青地多彩花文タイル——1

“クエルダ・セカ手法”とは、釉薬の色同士が混じり合うのを防ぐために、ワックスや油、マンガンの混合物で輪郭を描き、その内部を色釉薬によって彩色する手法。17-18世紀にかけてイランで多く用いられた。このタイルに使われた7色の主要な色によって、イランでは“ハフト・ランギー (haft=7, rengi=色)”タイル、すなわち7彩タイルと呼ばれることもある。実際には7色よりも多い色合いが用いられている[17世紀/229×217×23mm/イスファハーン]



[タイルのデザイン]

イスラームタイルの文様——2-5

イスラームの装飾文様は、装飾すべき枠内全面を覆い尽くすものであって、余白が残されることは忌避される。したがって、そのモチーフは繰り返しによって無限に広がる性質を持っているものが多い。モチーフは幾何学文様、植物文様、文字に分類され、タイルに描かれる文様は複数枚でセットとなり、繰り返し用いることで建物全体を残すところなくタイルで覆い尽くす

2—ファイアンスモザイクタイル表面:緻密に切り刻まれたタイル片は、間に目地がなく互いに密着して張られている|3—同裏面:各小片の裏側は台形であり、曲面にも施工は可能である[20世紀/150×170×16mm/イスファハーン]|4—多彩唐草文タイル[17世紀/140×140×15mm/イスファハーン]|5—青地多彩鳥草花文タイル[17世紀/242×233×22mm/イスファハーン]

[タイルのある風景]

イスファハーンのモスク——6,7

小宇宙を思わせるモスクのドームの球体面の内側には、ファイアンスモザイクタイルが嵌め込まれている。モザイクタイルを球体の上に隙間なく並べて、裏側を白いモルタルで固めた塊を天井から吊るしながら施工する。これに対し、平面の部分は一辺が約25cmの正方形の平板タイルに、クエルダ・セカ手法を用いて緻密な文様が描かれたハフト・ランギータイルが施工されている

6—イマームモスク:ムカルナス(鍾乳石飾り)の部分は、ファイアンスモザイクタイルによる装飾|7—同:平面の部分には、クエルダ・セカ手法で描かれたハフト・ランギータイルによる装飾

- イスラーム建築にとって、タイルは非常に重要な芸術要素であり、しかも長期に、広範囲に使用されている。今回は、16-18世紀のイランに起こるサファヴィー朝の、特にアッバース大帝がイスファハーンを首都とした16世紀末-17世紀前半のタイルを取り上げる。17世紀という時代は、世界中が文化的に爛熟期を迎えている。欧州ではバロック調、トルコではオスマン朝、インドではムガル朝が華麗な芸術を生み出し、日本でも桃山から寛永にかけての時期で、建築では清水寺、日光東照宮など、絵画では俵屋宗達、狩野探幽ら、美術工芸では本阿弥光悦らが優れた作品を生み出した、芸術のまさに爛熟期であった。
- イスファハーン(“世界の半分”を意味する)を首都としたアッバース大帝は、偉大な建設者でもあった。王の広場を飾る入り口のアーチやドームの内装、ファサード、ミナレット、窓枠など、建物全体がほとんど残すところなく装飾タイルで覆われている。当時、1枚のタイルの上に複数の色を同時に並べて載せて焼くと、色が混じってしまい、思いどおりのタイルをつくるができなかった。単色の釉薬やタイルから、いかにして多色の、より豊かな表現ができるかという命題に対して陶工たちが見出した技法として、初期にはファイアンスモザイクが考えられた。12-15世紀のセルジューク朝時代、幾何学や植物文様は、トルコブルー、コバルトブルー、白、黒などの単彩釉の掛かった陶器質のタイルを自由な形に小さく切り刻み、緻密に組み合わせた“ファイアンスモザイクタイル”によって装飾していた。その後、17世紀のサファヴィー朝時代になると、さらに緻密で複雑な文様を、早く、簡単に描くことができる“クエルダ・セカ手法”によるハフト・ランギータイルが同時に使われた。それまでの色に加え、茶、紫、緑を用いるのが特徴で、7彩タイルとも呼ばれていた。

— ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。

